プロジェクト

生活に根ざした学び 2025 年度の活動

酒本絵梨子　関根まどか　田口彩恵　松元彩那

2025 年度、生活に根ざした学びグループでは、自由学園が創立以来大切にしてきた「生活に根ざした学び」に改めて目を向け、各部で現在どのような実践が行われているのかを共有するとともに、そもそも自由学園における「生活」とは何かを問い直すことを目指して活動した。各部にある具体的な実践を共有するとともに、「生活」をどのように捉え、どのように可視化していくことができるのかについて対話を重ねた。

1. 各部にある「生活」の学びをつなぐ

本年度、まず取り組んだのは、生活団から最高学部まで、それぞれの教育現場で行われている「生活」に関わる学びを持ち寄り、共有することであった。

自由学園には、食、衣、住、農芸、自治、環境など、日々の暮らしと結びついたさまざまな学びがある。一方で、それらは各部・各教科・各活動の中でそれぞれに展開されており、学園全体として、現在どのような「生活」の学びが行われているのかを共有する機会は必ずしも多くなかった。

そこで、それぞれの部の実践を持ち寄り、一覧にすることを試みた。各部で行われていることを横断的に見渡せるようになったことは、本年度の一つの成果であった。同時に、実践を並べてみることで、「これらを私たちはなぜ『生活』の学びと考えるのか」「そもそも自由学園における『生活』とは何なのか」という、より根本的な問いも生まれてきた。

2. 具体的な実践から「生活」を考える

プロジェクトのメンバーで活動するだけでなく、メンバーは各部にその問いを持ち帰り、各部の実践を振り返ったり、実践を推進したりと、様々な取り組みがあった。以下にその活動を紹介する。

① 幼児の生活について考える

生活団では、創設当初から子どもたちが「生活」の基本的なことを自分でできるように指導してきた。現在でもその根本は変わらないが、時代に合わせて何をどのように教えていくかは考えていく必要がある。今年度、このことについて教師会で話し合う時間を持った。

現在も励み表を用いて取り組むものもあるが、日々の生活の中で教えていくものもある。その一つに「脱いだ服を畳む」ということがある。このことについて、教師間で考えの相違があり、時間をかけて話し合った。

脱いだ服の裏返しを直して畳んでおくと汚れた所が一目で分かる、畳んであるとかばんに入れやすい、取り出した時に気持ちがよいなどの意見がある一方、洗濯機に入れる時に畳んであるとかえって面倒ではないか、洋服を袋に入れるだけでも時間がかかる子どもに、畳むことまで促さなくてもよいのではないかなどの考えが出され、意見は平行線となった。

私たちが目指す「生活」はどのようなものであるか。まずはそこから検討し、目指すものが決まらなければ、答えは決まらない。プロジェクトメンバーだけでなく、生活団の中でも引き続き考えていきたい。

② 食に関する学び

現在、生活団から最高学部までの各部で本格的な「手作り醤油」に挑戦している。醤油絞り師の手塚愛さんの指導のもと、発酵環境による味の違いを比較・体験するなど、年齢に応じた学びや協働の輪を広げている。

今年度、中等部・高等部では「RO 農法探求」の生徒たちが栽培・収穫した大豆で仕込み、自給と循環の学びをさらに深めた。さらに、絞り後の「もろみ」を生かそうと生徒たちが考案した「もろみケーキ」は、昼食での提供や、保護者会でのレシピ付きもろみ販売でも大好評であった。

2026 年度からは「RO 農法探求」に組み込み、大豆の栽培から醤油の完成まで一貫して手がけることで、より生活に根づく学びへと発展させていく。

③ 焚き火を囲んで交流する

2026 年 1 月 6 日、交流を深めることを目的に、中等部ラ

ーニングコモンズ前にて焚き火を実施した。普段の会議と異なる環境を設定し、立場や所属にとらわれず自由に対話することで、新たな視点や意見、アイディアが生まれることを期待して企画した。

当日はプロジェクトメンバーに加え、他のプロジェクトメンバーやプロジェクト外の教職員も参加し、計 20 名ほどが立ち寄った。焚き火を囲む穏やかな雰囲気の中、普段よりも率直な意見や発想が交わされ、参加するメンバーの組み合わせによっても新たな対話が生まれた。参加者が分散する場面もあったが、今後の活動につながる、有意義な交流の機会となった。

3. 自由学園における「生活」とは何か

こうしたさまざまな活動をしていく中で、次第に「自由学園における『生活』とは何なのか」という議論も深まっていった。

生活団での「服を畳む」という実践についての議論が示しているように、これまで大切にしてきた生活のあり方を、単に方法として継承するだけではなく、「なぜそれをするのか」「どのような生活を目指しているのか」というところから捉え直す必要がある。また、醤油づくりのように、育てること、つくること、食べることがつながり、さらにその過程で生まれたものを再び暮らしの中で生かしていく実践には、現在だからこそ改めて考えることのできる「生活に根ざした学び」の姿も見えてくる。

そこで、まずは現在の自由学園に関わる人々が「生活」という言葉をどのように捉えているのかを知るため、次年度にアンケートを実施することを決めた。さまざまな立場から見えている「生活」を集めることで、自由学園がこれまで大切にしてきた生活の思想と、現在行われている実践とのつながりを考えていきたい。

もう一つ、本年度の活動の中で検討したのが、「生活に根ざした学び」をどのように可視化し、伝えていくことができるかということである。この点については、美術科の金井先生などにも加わっていただきながら、日々の中にある「生活」をどのように表現することができるのか、また、美術・芸術と生活との関係をどのように捉えることができるのかについて意見を交わした。

その議論は、単に「生活をどのように見せるか」という方法の検討にとどまらず、そもそも「学びとは何か」「生活とは何か」という問いにもつながっていった。たとえば、「この活動ではこのようなことが学べる」と分かりやすく可視化することによって、かえって子どもたち自身から湧き上がる疑問や発見、そこから生まれる学びの可能性を狭めてしまうのではないかという問いが生まれた。また、生活を何かを学ぶための「手段」として位置づけたとき、生活そのものを営むことが持つ意味が後景に退き、手段と目的が逆転してしまうのではないかという問題も浮かび上がった。

「生活に根ざした学び」を可視化しようとすることは、同時に、私たちが「生活」や「学び」をどのように捉えているのかを問い返すことでもある。本年度に生まれたこれらの問いを、次年度以降も具体的な実践と往還しながら検討していきたい。

4. まとめと今後の展望

本年度は、各部で行われているさまざまな「生活」の学びを共有し、一覧にすることから活動を始めた。それによって、それぞれの実践を学園全体の中で捉え直すとともに、「自由学園における『生活』とは何か」という問いを、改めてプロジェクトの中心に据えることになった。

重要なのは、「生活」という言葉に一つの定義を与えることではなく、各部で積み重ねられてきた具体的な実践を手がかりにしながら、私たちが何を大切にし、どのような暮らしや学びを目指しているのかを問い続けることではないかと考えている。

今後は、アンケートなどを通して学園内での「生活」の捉え方をさらに探るとともに、生活や暮らしを中心に学ぶ他団体や、持続可能な暮らしを実践している人々を訪ね、学ぶことも企画・検討している。また、自由学園那須農場についても、自然や食、生産、共同生活などを横断して生活を経験し、考えることのできる場として、より積極的に活用していきたい。

学園の中に既にある多様な実践をつなぎ、そこから「生活とは何か」を問い直す。本年度に始まったこの試みを、次年度以降もさまざまな人との対話や実践へと広げながら、「生活に根ざした学び」のこれからを考えていきたい。

2025 年度メンバー
真中昭典（初等部）、田口彩恵（生活団）、渡邉武俊（初等部）、関根まどか（中等部）、渡邉祐太（高等部）、
酒本絵梨子（最高学部）、松元彩那（広報室）